

樽前山の火山活動解説資料（令和8年6月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。
なお、山頂溶岩ドーム周辺では高温の状態が続いていますので、突発的な火山ガス等の噴出に注意してください。
噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図1、図2-①～⑥、図3～6）

監視カメラによる観測では、各火口や噴気孔群の噴気の高さは火口縁上100m以下で経過しました。噴気の高さは2021年秋頃はやや増大し、現在もその状態が続いています。

2日に実施した現地調査では、A火口、H亀裂及びB噴気孔群の地表面温度分布に特段の変化はなく、高温状態が続いていました。A火口では、2020年6月の観測以降に温度の低下傾向が認められていましたが、2024年6月の観測以降はほぼ横ばいとなっています。

・地震及び微動の発生状況（図2-⑦～⑨、図7）

火山性地震は少なく経過し、震源は主に山頂溶岩ドーム直下の深さ0km付近及び山体西側の深さ2～3kmに分布しました。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図8）

GNSS連続観測では、火山活動の高まりを示すような変化は認められません。



図1 樽前山 南側から見た山頂部の状況（別々川監視カメラによる）

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』、『数値地図 25000（行政界・海岸線）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

今回の火山活動解説資料（令和8年7月分）は令和8年8月10日に発表する予定です。

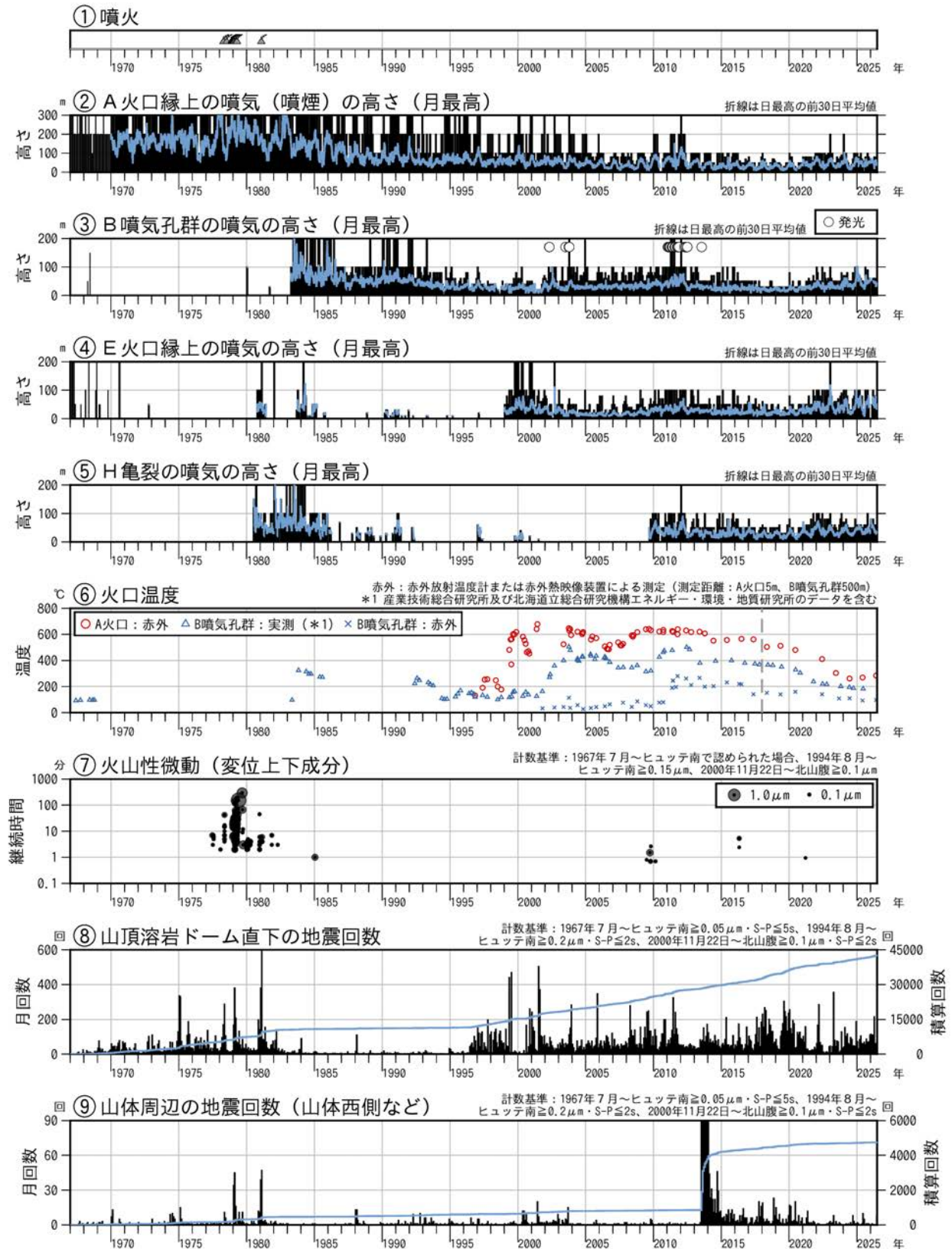


図2 樽前山 火山活動経過図（1967年1月～2026年6月）

⑥：2018年（破線）前後では測定機器の変更により、測定温度に差が生じている可能性があります。

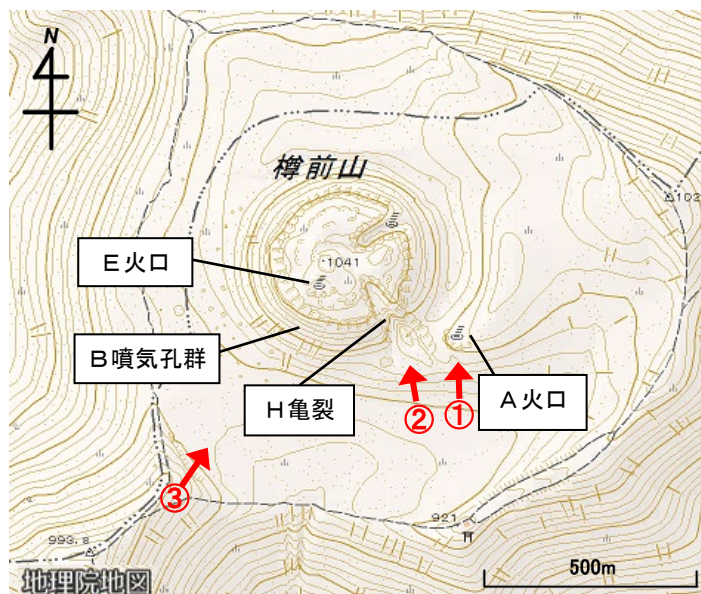


図3 樽前山 山頂溶岩ドーム周辺図と赤外熱映像及び写真の撮影方向（矢印）

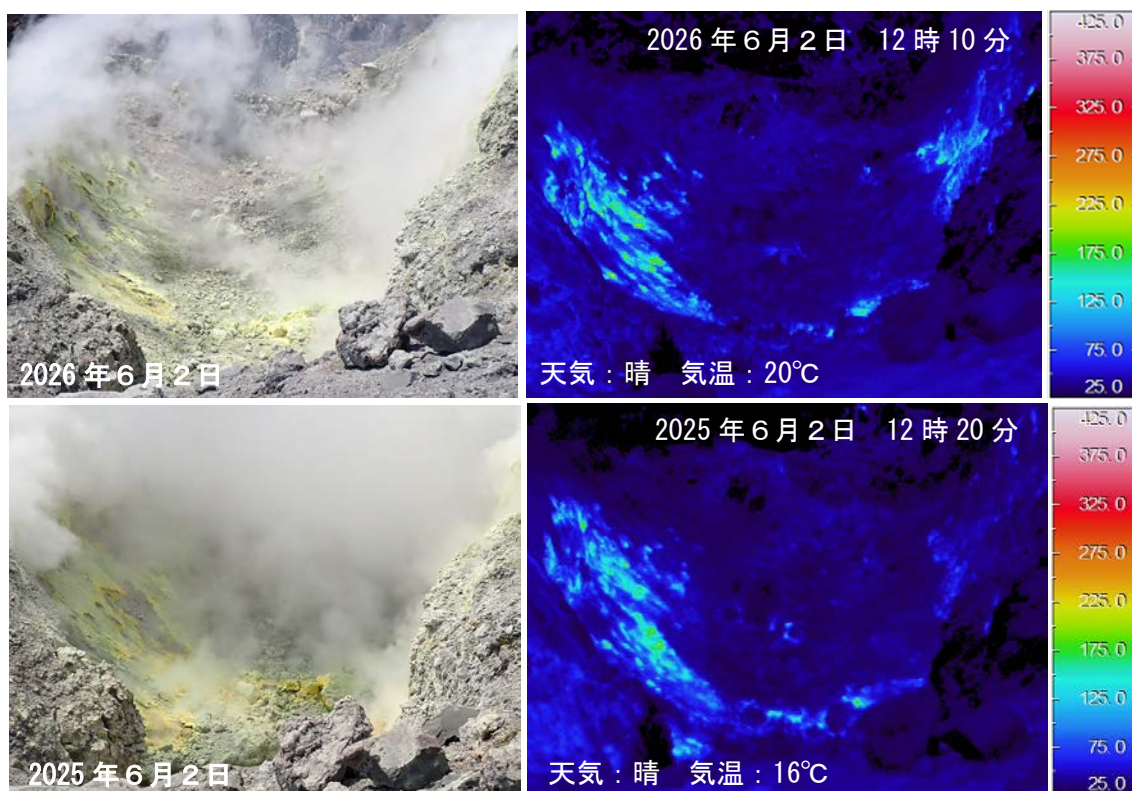


図4 樽前山 赤外熱映像装置によるA火口の地表面温度分布の比較

南側（図3の①）から撮影

- ・ A火口では、前回の観測（2025年6月）と比べて地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。

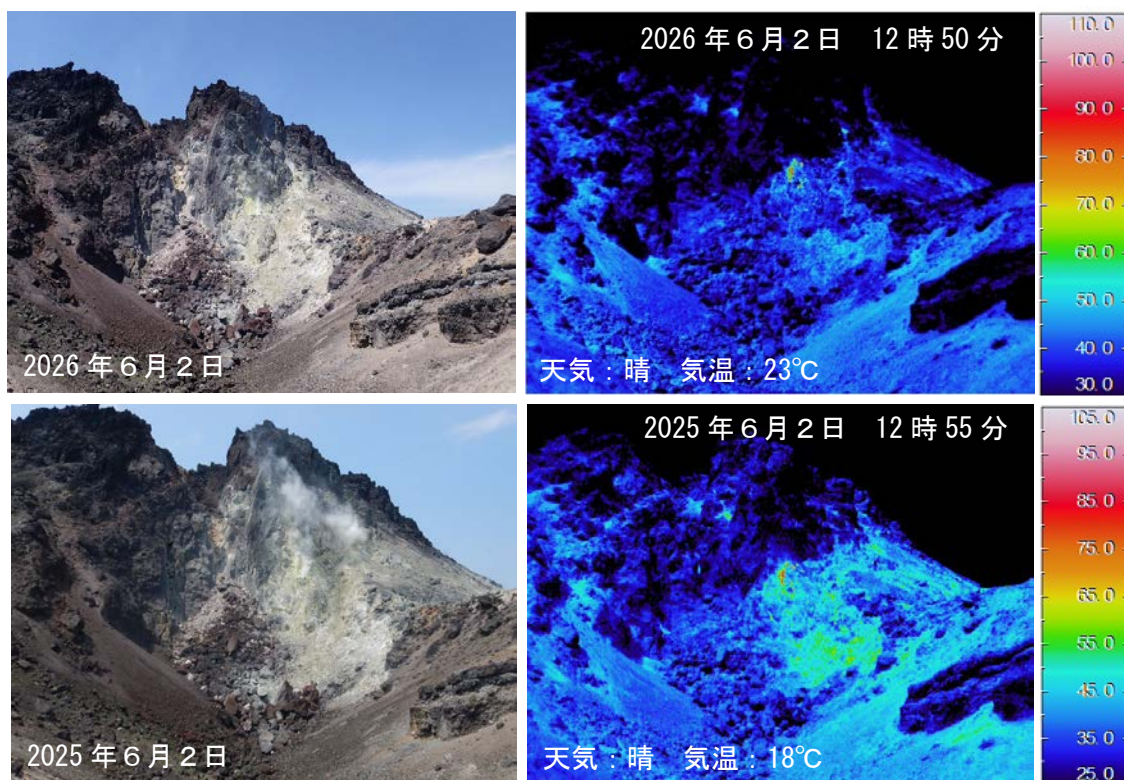


図5 樽前山 赤外熱映像装置によるH亀裂の地表面温度分布の比較

南側（図3の②）から撮影

- ・ H亀裂では、前回の観測（2025 年 6 月）と比べて地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。

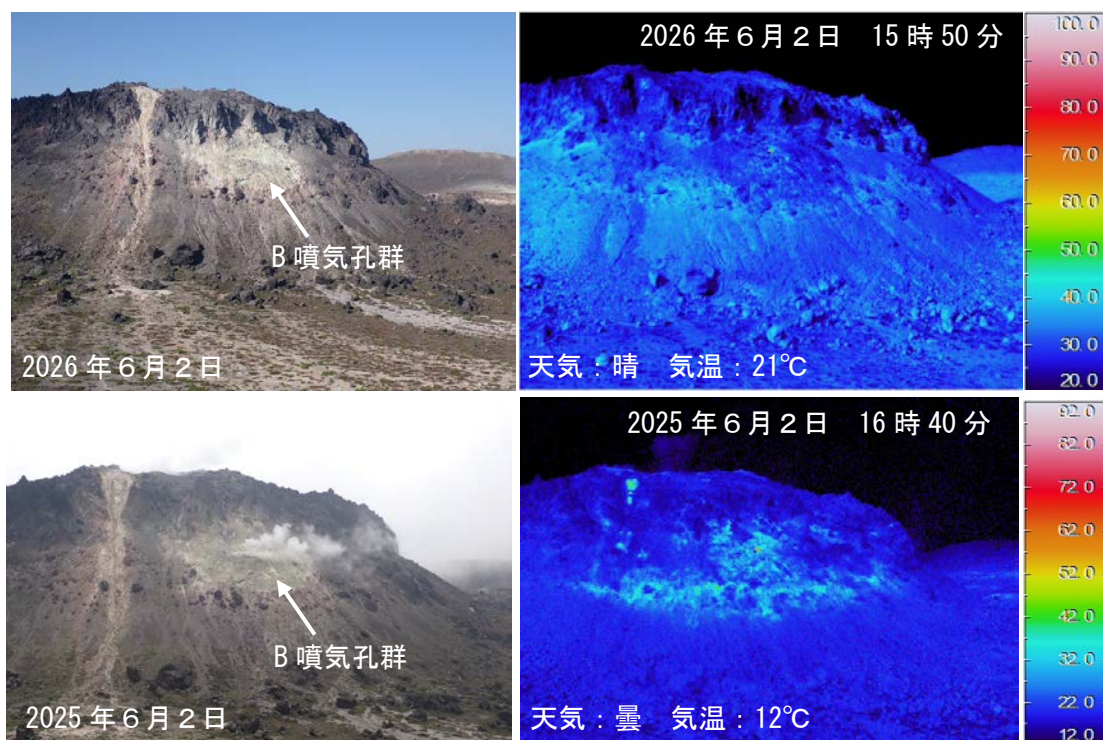


図6 樽前山 赤外熱映像装置によるB噴気孔群の地表面温度分布の比較

南西側（図3の③）から撮影

- ・ B噴気孔群では、前回の観測（2025 年 6 月）と比べて地表面温度分布に特段の変化は認められませんでした。

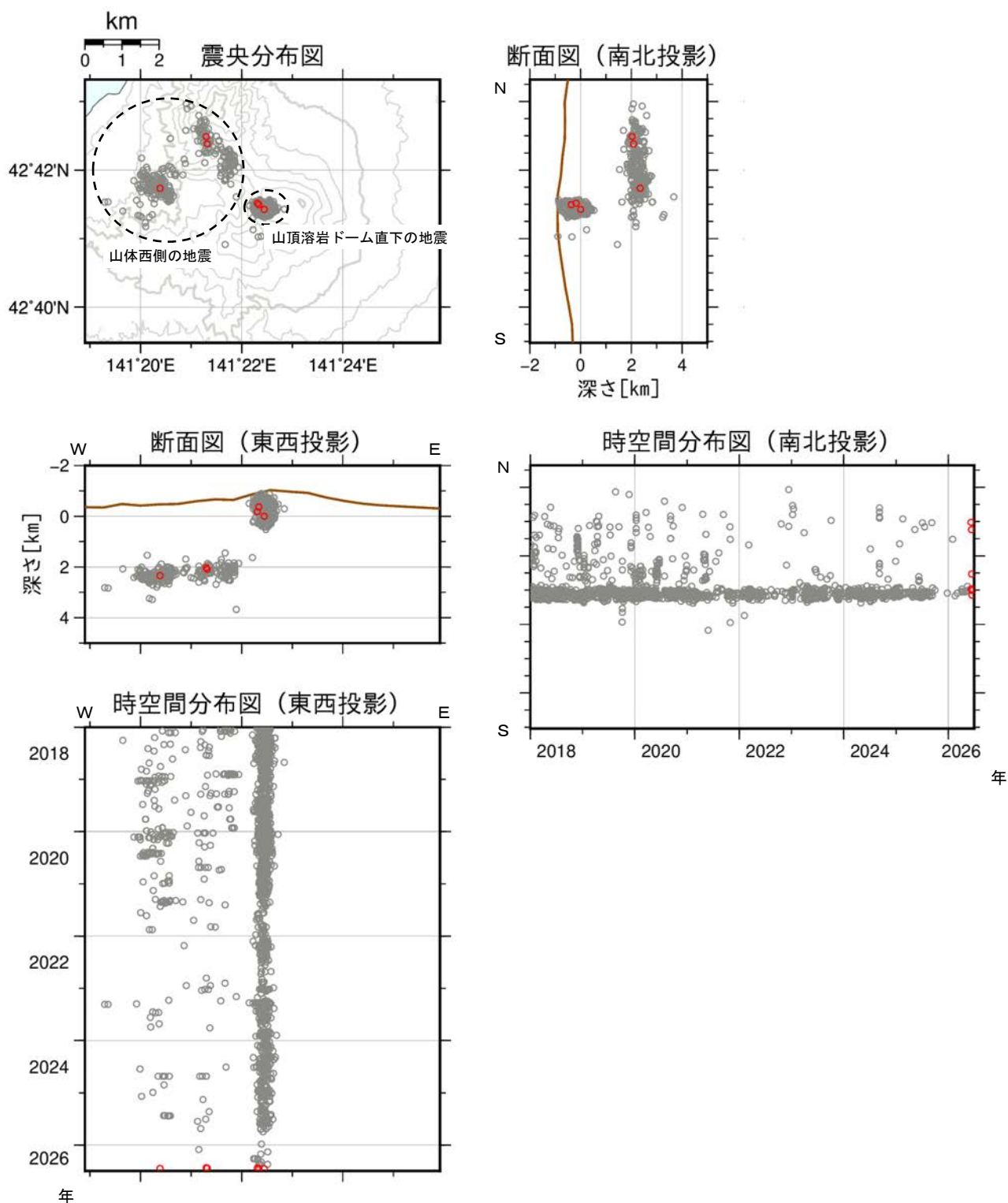


図7 樽前山 火山性地震の震源分布（2018年1月～2026年6月）

○：2018年1月～2026年5月の震源 ○：2026年6月の震源

2025年10月頃以降、一部観測点の欠測のため、震源の求まった数が減少しています。

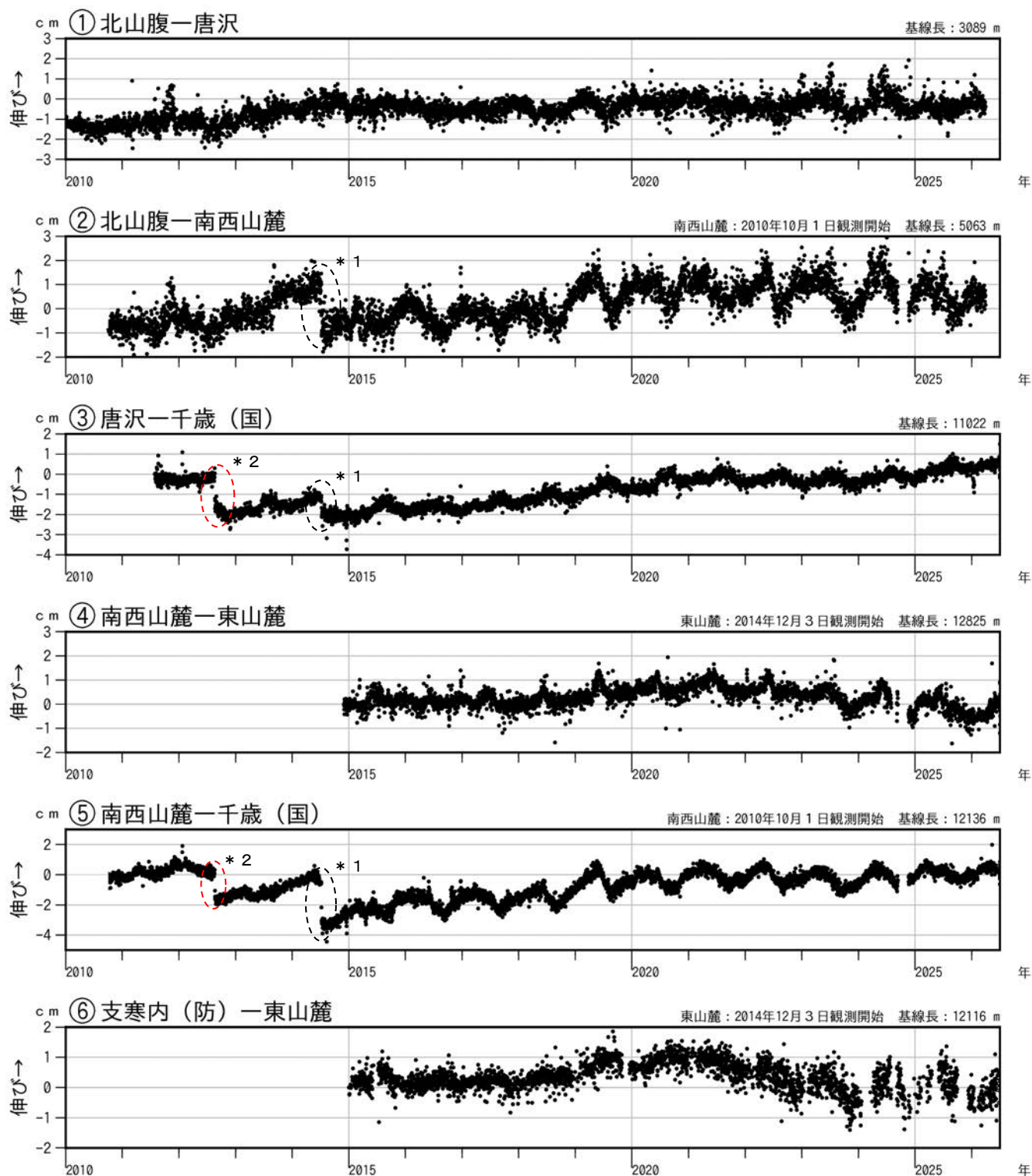


図8-1 樽前山 GNSS連続観測による基線長変化（2010年1月～2026年6月）

グラフ①～⑥は観測点配置図（図8-2）の基線①～⑥に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示しています。

* 1：黒破線内の変動は2014年7月8日に発生した胆振地方中東部の地震によるものです。

* 2：赤破線内の変動は機器変更によるものです。

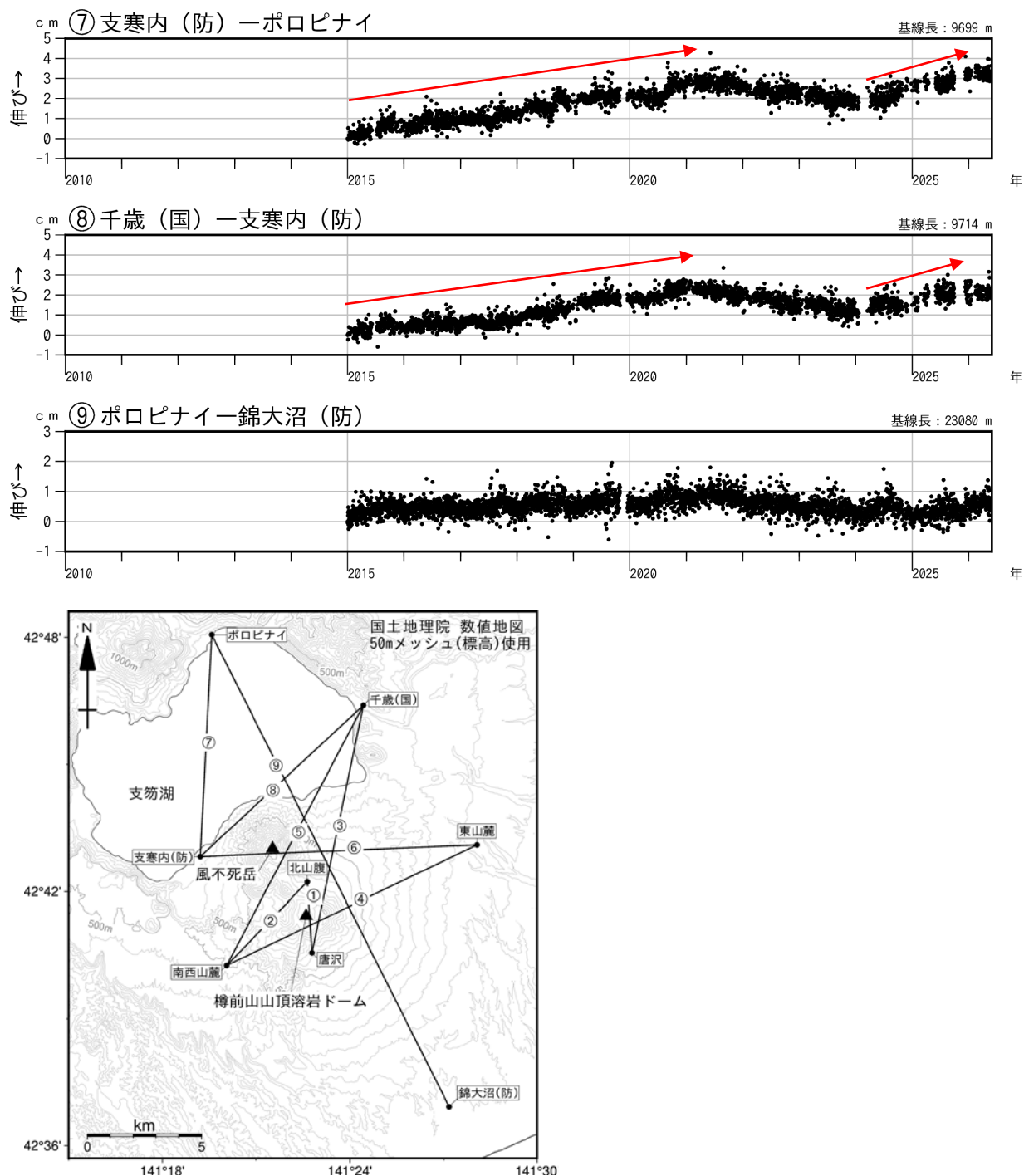


図8-2 樽前山 GNSS連続観測による基線長変化（2015年1月～2026年6月）及び観測点配置図

グラフ⑦～⑨は観測点配置図の基線⑦～⑨に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示しています。

- ・支笏湖周辺を挟む一部の基線（主に基線⑦⑧）では、数年程度継続するゆるやかな伸長が時々認められます（赤矢印）。

